

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

平成 24 年 10 月 31 日

派遣者氏名（専門分野）	水田 百合子（映画研究）
-------------	--------------

下記のとおり報告します。
記

研究テーマ	ジャン・コクトーの映画制作 —書かれた物語と映画の物語—
-------	---------------------------------

派遣期間

平成 24 年 9 月 10 日 ～ 平成 24 年 9 月 24 日

訪問研究機関	国	都市	訪問機関	受入研究者
	フランス	パリ	シネマテーク・フランセーズ	
	フランス	パリ	パリ第 3 大学 図書館	
	フランス	マントン	ジャン・コクトー美術館	

派遣先で実施した研究内容

フランスの詩人であるジャン・コクトー（1889-1963）は、詩、小説、戯曲、評論、デッサン、映画、壁画装飾と様々な分野を横断し活動した芸術家である。本研究は、その中でもとりわけ彼の映画作品に着目し、その具体的な制作過程を正確に再構成することを目的としている。コクトーの監督作品は、『詩人の血』（1930）、『美女と野獣』（1946）、『双頭の鷲』（1947）、『恐るべき親たち』（1948）、『オルフェ』（1950）、『オルフェの遺言』（1960）の 6 本あり、それらのすべてが研究対象となる。

今回のリサーチでは、フランス・パリにあるシネマテーク・フランセーズの研究者閲覧室にある、これら 6 作品のシノプシス・シナリオ・デクパージュ等を参照した。資料が原本であるかどうか、それが制作のどの段階で使用されたものであるのかを調査し、出版されたものとの異同に関して詳細な検討を行った。その際、資料閲覧室の係員に随時質問し、資料の種類や収蔵の背景などを可能な限り調査した。コクトーが映画制作へと本格的に乗り出していくきっかけとなったのは、同時代にフランスで活躍していた監督たちの映画制作に台詞作家・脚本家として参加した経験である。たとえば、ジャン・ドラノワの『悲恋』（1943）、ロベール・ブレッソンの『ブルーローニュの森の貴婦人たち』（1945）などは、彼自身の作品のスタイルに少なからず影響を与えている。コクトーが執筆した他監督映画のデクパージュと、上に挙げたコクトー自身の作品のそれを比較し、彼の映画制作がどのように始まり、どのように発展していったのかを見た。また、絶版になっていて手に入れるのが困難な資料のデッサンページを写真に収める、文章の重要な箇所をノートパソコン内に収めるなどの作業を行った。

パリ第 3 大学図書館では、コクトーに関連する資料・文献、コクトーをテーマにしている論文を閲覧した。コクトーは様々な分野で研究されているが、映画に関するものを中心に、小説・演劇・絵画等、他のジャンルと映画との関連を考察した様々なテーマの論文に目を通すことができた。

コクトーにおける作品制作の過程を語ろうとすれば、南仏という地理的環境に触れないわけ

にはいかない。というのも、晩年のコクトーは一年の大半をそこで過ごし、芸術活動を行ったからである。この地で壁画装飾や映画制作に没頭するための拠点が、彼が1950年頃から11年間住んでいたというサント・ソスピール荘である。この別荘は、1951年に制作されたドキュメンタリー『サント・ソスピール荘』と1960年の『オルフェの遺言』の舞台として使用されたという点で、本研究にとってはきわめて重要な場所である。今回の調査では、このサント・ソスピール荘を実際に訪れ、その別荘内にコクトーが描いた壁画を写真に収めることができた。また、そこで当時のコクトーの生活や交友関係について解説を聞いた。ヴィルフランシュ=シュル=メールでは、コクトーが好んで滞在していたというホテル「ウェルカム」、またその向かいにあるコクトーが内部の壁画を手がけた「聖ピエール礼拝堂」を見学した。このホテルで、コクトーは執筆活動を行っていたという。マントンでは、この滞在の目的である、ジャン・コクトー美術館（旧館と新館）、コクトーが内装を手懸けたマントン市役所内にある『婚礼の間』（1958）を見学した。美術館は、旧館と新館に分かれている。旧館はかつての城塞をコクトー自身が改装し美術館にしたもので、晩年の絵画作品の一部と陶芸作品が展示されており、映画『サント・ソスピール荘』（1951年）の上映も行われている。新館は、コレクター、セヴラン・ワンダーマンが収集したコクトー作品をもとにして2011年11月につくられた。この新館は、とりわけデッサンや映画に関係する資料や写真が多く展示されており、イメージ作品に特化した美術館であるといえる。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

当初の目的は、コクトーの主要映画作品とそれに関連する他の監督の作品のシナリオ・デクパージュを閲覧し、それぞれの映画において、構想が練られ撮影されるにいたった具体的な過程を明らかにするとともに、さまざまな関連資料（コクトーが制作時にスタッフに送った書簡、映画制作者たちが使用したとされる資料）、あるいはコクトーに関する主要な学位論文等を閲覧することであった。今回の計画の達成度としては、予想以上の収穫が得られたといえる。シネマテークでは、コクトーが実際に使用したとされるデクパージュを閲覧することによって、40年代初頭、コクトーが他の映画監督による映画制作に積極的に参加することから始めて、みずからの手による映画制作へと活動の幅を広げていった経緯を、かなり鮮明な形で理解することができた。たとえば、初期のシナリオでは、登場人物の名前と台詞が書かれただけのものではあったが、人物の動きやカメラの動きが書き込まれ始め、徐々にコクトーが映画制作の総指揮を念頭に置きはじめたことがわかる。『ブーローニュの森の貴婦人たち』のデクパージュでは、すでに映画の専門用語が書き込まれるようになり、自らの監督作をかなり意識していたことが推測できる。コクトーを映画制作へと駆り立てていった動機や問題意識等が、上記資料の閲覧を通じて可能となるとともに、コクトーの監督作6本における初発的構想の起源とその発展過程の一端を発見することができた。

南仏にあるコクトー関連の場所の調査は、彼の晩年の活動を知る上で大きな成果をもたらした。当初目的としていたコクトー美術館の他にも数箇所を訪れ、コクトーが生活をし芸術制作を行っていた土地の特徴を調査することにより、後年の映画の舞台や装飾に関してそれらの場所がアイディアの源になっていたことを確認した。また視点を変えれば、彼自身の生活の場でもあった別荘内部やその周囲の景色をフィルムに残しておきたいという彼の意図が、少なからず彼を映画制作へと駆り立てたということも推測できる。実際に現地へ行き、その土地の風土や、そこにある壁画装飾を中心としたコクトーの作品群を観察できたことは、今回の調査における大きな収穫である。今後、収集した資料・現地で見ることができた作品群をもとに、詩人ジャン・コクトーの映画作家としての側面についてさらに考察を深めていきたい。

派遣後の研究発表の予定

大阪大学文学研究科美学研究室ゼミで発表予定（2012 年 11 月 20 日）

博士予備論文提出予定（2012 年 12 月 3 日～7 日）

日本映像学会で発表予定（2012 年 12 月 8 日）

美学会西部会で発表予定（2013 年時期未定）